



TITLE:

七世紀初頭の中國における内亂について(下)

AUTHOR(S):

横田, 滋

CITATION:

横田, 滋. 七世紀初頭の中國における内亂について(下). 東洋史研究
1953, 12(5): 446-462

ISSUE DATE:

1953-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138981>

RIGHT:

七世紀初頭の中國における内亂について（下）

横 田 滋

五 内亂の發展とその終焉

高句麗遠征を契機とする中國農民の抵抗闘争は素晴らしい高まりを示した。しかし歴史の齒車はこの農民叛亂の志向とは逆に、反農民的な唐朝政權の樹立の方向に、その廻轉をかえていつた。つまり内亂における農民闘争の成果は唐朝權力の爲につみとられていつたのである。これは一体どうしてであらうか。ここで私は農民を中心とする内亂がどのような發展の過程をたどり、どのような矛盾がかく齒車の廻轉方向をかえたのかを考えたい。

(1) 先にも簡単にふれたように農民達は抵抗の過程において、權力に對する個人的抵抗の弱さを身を以て感じとつていつた。しかもかかる弱さを克服し抵抗をつづけること

なくしては、自らを支配の絆から絶対に解放しない、そういう場におかれた彼等が見出した道は、みんなの力を結集するということではなかつたらうか。彼等がそれまで人民の組織をどのように作つてきたか、それはわからない。この時代、廣汎にみられる「聚衆爲盜」という群盜集團は、追いつめられた貧民達がおそらくは最初に作り出した組織体であつたらうが、大業九年（六一三）宋子賢、向海明が彌勒佛信者の結合を中心に無遮佛會を作り、¹⁾「經史を涉獵し頗る兵法に明るく」「崑山縣博士」となつた朱爰が、數十の學生と苦役の農民からなる組織を作つてゐる事實から推して、信仰を媒介とし、村の塾を中心とし、また身近な隣保、郷里制を基礎に抵抗組織が創造され、抵抗の高まるにつれて廣く且つ強化されていつたであらう。もとよりそこ

には農民の散漫性がつきまとつていたにしても、抵抗が組織性をもつてくるということは、権力に對する自己防衛↓鬭争の質的發展を意味する。かかる場合の組織者——先にあげた王薄や劉霸道もその一人であつたろう——は、貧農出身のものもあつたにちがいないが、一般に農村における土豪ではなかつたろうかと思う。

しかし二百餘の蜂起のなかで、どれが土豪を領導者とするものであつたかを知るのは容易でない。ただ大業十二年（六一六）初までの數多い諸叛亂は、大抵「某地の人何某」「某地の民何某」とあり、その出身などわからない人物を領導者とするものであるが、恐らくこれが土豪をはじめとする農民の叛亂であつたと思う。即ち七年暮に叛亂をおこした竇建德、彼は自ら直接生産もする農民で、郷黨歸附し里長となり、父卒するや送葬者千餘人、遠征に當つては二百人長になつたというが、いわば彼の如き均田制支配下の階級分化のなから成長してきたと思われる地主的農民Ⅱ土豪をはじめ、「少より落拓、産業を治めず、家貧にして以て自ら給するなし。毎に穿窬して盜をなし」た杜伏威⁴⁾のような貧民が指導者になつてゐる。従つて階層的にかな

り廣い幅をもつて考える必要があるが、そのなかに里長・郷正その他官僚機構の末端乃至下級官僚の地位にあつたものが、叛亂の先頭にたつてゐることは考うべきことである。彼等は村落社會の頂點にあつて農民層の中に支配力をもつものであるが、國家は彼等を上からつかみ、それを通じて権力を下部まで貫徹しようとしていたのである。換言すれば、彼等はその貫徹過程において手先の役割を果してゐた。同時にその階級的基盤と在地性の故に、上下の力關係によつては、権力に對立する可能性をもつ存在であつた。その彼が鄉村において行政的に活動するのは、それによつて在地における地位と利益が保證されればこそであらう。けれども配下農民の逃亡をはじめとする抵抗の高まりと、上からの支配強化によるジレンマは、その政治的立場をぐらつかせてくる。それは背景をなす國家權力の動搖、激化する農民の抵抗、遠征によつて強化された支配と收奪から、彼等をも逃れさせない結果としての反權力化傾向等と深くからみあつてゐる。かくて彼は農民のいわば代表者としての自己をより強く實現し、農民の要求をもつて権力に對決するものとして階級的行動をとるのでなければ、在地土豪

としての地位と利益は維持出来なくなる。まして官僚支配機構に直接のつながりをもたぬ土豪にあつては、なおさらかかる行動をとらざるを得なかつたであろう。したがつてまた、鄉村における土豪と貧農の對立性——それは土豪なるが故に徹底的に貧農的立場にたちえないところからくる——も、鬭争の激化過程においては土豪自体、貧農とおなじ政治的階級的行動をとらざるを得なくなるために、表面的には姿を消し、叛亂の先頭に土豪層がおしあげられてくるのであらうと思う。

これら農民集團がどんな組織をもつていたか、よくわからない。貧農杜伏威は「常に敢死の士五千人を選びこれを上募といひ、寵遇甚だ厚く」⁹⁾また「壯士三十餘人を養いて假子となし兵馬を分領せしめた」¹⁰⁾というからして、彼の場合假父假子の「人倫的結合の形式をとり乍ら、實質的には利害得失を根本紐帶とする武力的結合」¹¹⁾假子的結合關係を中核とし、周邊を一般農民で固めた軍事的組織をもつていたように思う。もちろん隋末においてかかる關係は、杜伏威のほか煮塩を業とした高開道と、前述の竇建德の集團に見出されるだけであるから一般化できないにしても、恐

らく何等かの軍隊的組織が作られていたであらう。單なる烏合の衆であつたとは思われない。彼等は農山村を中心とする軍事行動から都市に擴大移行してゆくあいだに、次第に集團自体の組織性を高めたであらう。そして徐々に隋朝支配を排除して、たとえば扶風の唐弼が李弘芝をたてて天子とし自らは唐王と稱し¹²⁾、延安の劉迦論が皇王と自稱して大世と建元¹⁰⁾、上谷の王須拔が漫天王と自稱し國號を燕と名付けているように建國稱號して獨自の政權をうちたてた場合の体制も、恐らくその軍事組織を基礎にしたものではなかつたらうか。また國名をもち建元したといつても、それは農民自治体というようなものであつたらう。

集團がかかる組織的發展をするについては、個々の集團が漸次横に連合しつゝあつたことと關連する。淮安にあつた杜伏威が下邳の苗海潮に對し、「今同じく隋政に苦しみ各々大義を興すも、力分れて勢い弱く、常に擒せられんことを恐る。何ぞ合して強とならざる」と、共通の敵をたおすために廣く連合すべきことを主張している¹²⁾。鬭争の經驗はかかる連合を要求しつゝあつたのであらう。しかしこのような主張がなされるということはそれだけに、なお集團

相互間の組織的連合の不十分さを物語る。それは十一年（六一五）を通じて農民軍が隋軍事力の爲にかなりな敗北を蒙つたのに對し、十二年—十三年にかけて勝利的な發展をしていることから推測される。即ち敗北の重大な原因が連合の不十分さにあつたとともに、①丁度隋朝政府が失敗に終つた遠征軍を再編成して、齊郡通守張須陁をして河南地方を、衛尉少卿李淵に山西方面を、太僕卿楊義臣に河北地方を、光祿大夫陳陵をして淮南地方を、その他屈突通、王世充、薛世雄等をして各地方を軍事的に支配させ、農民叛亂の鎮壓にのりだしてきたこと、②更に十一年二月に、「民をして悉く城居せしめ、田は近きに隨いて給す。郡縣驛亭村塢は皆城を築くべし」と詔した。それは「戸口逃亡盜賊繁多」の現實に對應する措置であり、「強弱相容れ力役兼濟せしめ、穿窬も其姦宄を厝く所なく、崔蒲も其の逋逃を聚むるを得ざらしめ」て、農民と叛亂軍との分離及び彼の孤立化をはかつたことの二つに原因する。ともかくこの敗北は教訓を與えたか、十二年になると、從來その方向にあつたとはいえ、なお小規模、分散的、孤立的であつた弱點が克服され、集團統合による強力な編成を

作りあげたと思われる。さきに再編配置された隋軍事力を打破るに至つたのは、その結果であろう。即ち張須陁は十二年十月に、河南を中心とする翟讓—李密的軍に破れ、光祿大夫裴仁基がこれに代つたが河南の支配權は回復できなかった。また河北の農民軍は一時楊義臣に壓迫せられたが、寶建德の作戰によりこれを追い、義寧元年（大業十三年）正月には河北樂壽に夏國政權をたてるにいたつた。¹⁴⁾（このころになると、前述の時よりはるかに國家的組織をととのえてゐる。その性格も、さきのが農民的色彩の濃厚だつたのに比して隋朝官僚的であるのは注）更に江南では杜伏威の集團が隋の名將陳稜を破り、歷陽を中心にその支配を確立し、まさに江都を攻撃しようとする態勢にあつた。

かくて農民の叛亂は「戰敗れて復た聚り其勢益々盛ん」という執拗さをもつて展開し、隋朝政權崩壞前後には河北・山東・河南・安徽・江蘇・湖北・湖南に亘る廣大且つ經濟的重要地域をその掌握下においたのである。それはまことに素晴らしいエネルギーといわねばならぬ。しかしかかる發展過程において、農民集團を分裂解体せしめる萌芽が一方に成長しつつあつたことを見逃してはならない。

(2) ところで外征による大なり小なりの利益を期待した貴族・官僚達にも、それが導き出している現實のみじめさを認めないわけにはいなくなつてゐた。第三次遠征を議つた煬帝に、百官が「沈黙」をもつて答えたという事實は、楊玄感の亂を機に政府内部に反遠征の空氣が高まつてきたことを物語るであらう。同時に叛亂の激化が政府を動搖せしめ、こうした空氣が強くなればなる程、文帝時代からつづいた官僚内部の對立は益々激しくなつていつた。即ち虞世基・裴蘊等一連の政府官僚はひたすらに自己の政治的地位をまもるため、隋的秩序が崩壊しつつあること——叛亂の激化と政府軍の慘敗等——を煬帝に知らすまいとしてその實情を奏せず、一途に迎合した。他方では、天下大亂の事實を知らせて危機を打開しようとする蘇威・韋雲起等官僚の抗議を、朝政を誹謗し不軌をはかるものとして退けた。¹⁷⁾もとより蘇威などに代表される官僚達が、隋朝權力を否定して歴史を前進せしめようとするものでないことはいうまでもない。儒教的慈惠政策を加味することによつて、専制權力を維持し、當面する危機を乗切ろうとする、いわば古い型の儒教的正義派官僚であつたにすぎない。しかもかか

る官僚をさえ次々と排除してゆかざるを得なかつたということは、煬帝とそれにつながる迎合的な支配官僚が、益々孤立化、獨裁化してゆく内部的矛盾のあらわれであつて、その權力の動搖の大きさを、政治的危機の深さを示すものである。通鑑によれば、煬帝は大業十二年（六一六）四月大業殿西院に火災おこるや、『盜起る』と驚いて西苑の草の中ににげこんだという。そのあとつづいて「帝八年より以後、毎夜眠るも恒に驚悸して云う、『賊あり』と。數人の婦人をして搖撫せしめ、乃ち眠るを得」とある。¹⁸⁾叛亂のきびしさがいかに彼の心をしめつけていたかをうかがわしめると共に、その専制がかかる不安とからみ合つていたことをしるのである。

隋朝のこのような政治的危機をよそに、煬帝は七月、宇文述の勧めにより「我は江都の好きを夢みる。征遼も亦偶然」と宮人に留別の詩を残し首都を棄てて江都に去つた。¹⁹⁾時に江都では食糧欠乏し守備の將士の心は動搖離反しつつあつたという。²⁰⁾朝臣の多くが之に隨行するを欲しなかつたのも、現實のきびしさが彼等に反映し、この行幸によつて生ずる事態の重大性——危機の深化が意識されたからではな

かつたろうか。所詮このような情勢時に皇帝が首都をはなれるということは、権力の分裂を積極的に導く。

果然、抗議は内外からおこつてきた。先づ右候衛大將軍趙才は、「百姓疲勞し府藏空竭す。盜賊蜂起し禁令行われざる」現實を訴え、京師にかゝりて兆庶を安んぜんことを諫言し、²¹⁾奉信郎崔民象、建節尉任宗、王愛仁等が次々諫止した。²²⁾

(大業十年には
沈黙であつた)

そればかりではない。車駕梁郡に至る

や郡人これを邀えて上書し、「陛下若し遂に江都に幸せば、天下は陛下の有にあらす」と、隋朝の崩壊を暗示するかの如き言葉を以て迫つた。²³⁾また煬帝の龍舟をひきながらうたう人民の、憎惡と哀愁をこめた長い歌聲はついに帝をして「頗る彷徨、通夕寐ねざらしめ」た。²⁴⁾楊州で集めた朝貢使も一人としてくる者なく、來た者も貢物は途中で叛亂軍に奪われてゐる等の現實に直面して、帝も、「世祚もはや去れり」と感ぜざるを得なかつた。²⁵⁾

従つて夢にみた「江都の好き」風物も心を樂します苦はなし。「荒淫益々甚しく」「天下危亂に意も亦擾擾、自ら安んぜず」、帝都に歸る心さえ失ひ、鏡をみては「この首を何人が斫りおとすであらうか」と洩らす煬帝であつた。²⁶⁾官僚の

中には長安復歸を請う者もあつたが退けられ、虞世基等の專横は募つてゆくばかりで、²⁷⁾江都宮内、殊に宿衛兵に禁軍の中にさえ謀反のささやきがみちて來た。蕭皇后も亦「天下の事一朝ここに至る。勢已に然り、救うべきでなき」、ことを認め、かの遠征をすすめた黃門侍郎裴矩は、

「天下亂れ身の禍となるのを恐れて、人を遇するにもその所望以上に遇し、厮役の召使等にさえも歡心を得よう」と、その動搖振りを露骨に示していた。²⁹⁾こうした情勢は、李淵集團の長安入城(義寧元年)の衝撃もさることながら、直接的に

は先にも少しくふれた杜伏威を首領とする江南の農民連合軍が、江都に迫ろうとするなかから生れて來たのである。

もはや隋朝政權の動搖と分裂はその極點に達したといえよう。

(3) このように隋朝政府をギリ／＼まで追いこんだ農民叛亂の展開過程において、地方の門閥貴族、豪族、官僚等は、降伏したもの、本貫をはなれ有力者をたよつてその保護を求めざるを得なくなつたもの、没落を餘儀なくされ子女を奴隸にするものもあつた。³⁰⁾また武裝して自衛態勢を整えたものもあつた。しかし全般的に諸叛亂の激發によつて

彼等の既存の社會的經濟的支配力は、隋朝權力がマヒするにつれて大きく動搖したであろう。とりわけ周邊からつきあげてくる農民の革命的エネルギーが、彼等支配下の隸屬農民を動搖せしめ、それ等農民と豪族の支配との相剋が深まることによつて、その動搖はより痛切であつたであろう。そうしたなかで煬帝江都に去り隋朝政府の崩壊漸く近い義寧元年（六一七）³¹⁾初から積極的に舉兵してくるのが、中小豪族、地主・武人官僚である。「家財に富み窮乏の人を賑濟し、大業末鷹揚府司馬となつた」武威の李軌³²⁾。「驍勇絶倫にして家貲鉅萬、豪傑と交結して西邊の雄であつた金城府校尉」の薛舉³³⁾。「代々本郡の豪傑で隋の鷹揚郎將」であつた朔方の梁師都³⁴⁾。「豪俠に交通し州里の雄、土豪といわれ鷹揚府校尉」の馬邑の劉武周³⁵⁾。山西太原に軍司令官として勢力のあつた李淵。「世々郡の著姓たり。宗族數千家、吳興太守」の沈法興³⁶⁾。「後梁宣帝の曾孫」にして羅川令の蕭銑等³⁷⁾がそれである。これらは後の二人を除いて皆武人官僚で、その舉兵が北方、西北方地域にかたよつてゐるのは、中原地域が農民軍によつて抑えられていた結果であらう。

さて隋代には煬帝の時に奴婢の給田を廢止し、同時に諸王以下都督に至る官人に對して百頃以下の永業田を給した。³⁸⁾思うに南北朝以來の貴族權力は、この時代になつて土地所有の基準を直接に奴隸所有におくのではなく、むしろ官僚的位階におくことによつて、いいかえれば、門閥・豪族としての既成の權威だけでは自己の大土地所有も私的人民支配も維持し得なくなり、官僚制に寄生化することによつて大土地所有の合法性、法的確認を獲得し、從來の地位と利益を維持しようとしたのではないか。もつといえど官途につかなければ合法的に大土地所有者たりえなくしようとしたのではないか。もしそうなら古き貴族支配体制に危機が到來しつゝあつたといふであらう。³⁹⁾

ところで地方の中小豪族層は元來中央の官途に特權を有する門閥貴族のように、舊來の貴族的官僚体系を榮進する可能性は、それほどあつたとは思われない。まして大土地の合法的所有が官僚的位階によつて決定されるとするならば、なおさら彼等にとつては問題だ。そうした現實の不平不満は、更に反貴族的反政府的感情を醸成し、何等かの機會に乗ずる官僚機構へのくいこみ、鄉村支配擴大の「野心」

となつて温存されていつたと思われる。そうした不平不満——野心の達成をねらい、他方多かれ少なかれ自己の領域における豪族支配の動搖に直面していた彼等にとつて、貴族支配体制の動搖という歴史的時點におこつた内亂は、まことに好機であつたと考えられる。(このことは現職の下級官僚、官界復歸を欲する在野の、亡命の官僚にもあてはまる)。しかしかかる中小豪族や前述の武人官僚は、自己の隸屬農民を武装させるだけでは舉兵し得る程にも農民を所有していなかつたようで、周邊農民側の客觀情勢を考慮し、これを組織するのになければたちあがれなかつたのが實態のようである。従つて彼等のいわゆる「異計、野心」は、在地周邊の不安と動搖——百姓亂を思うという如き——が叛亂への傾斜をもちはじめてくるのに對應して具体的な姿をとつていつたものと思われる。その場合下からつきあけてくるエネルギーは、その階級的性格の故にこの野心を媒介としてうけとめられ、逆にそれを利用しようとするのは當然であらう。しかもあくまでもその野心は表面に出されず、農民の經濟的要求をつかみ、これを煽動して組織化したのである。

さきにもひいた劉武周は、郡太守の侍婢に私通したのがばれそうになつたので舉兵するが、彼は「今百姓飢餓し死人野に相枕す。王府尹、倉を閉して恤まず、あに百姓を憂うるの意あらんや」と郡中によびかけている。その彼はまた「天下すでに亂れるをみ、陰に異計をいだ」いていたという。在地に相當な勢力を有していた彼にして、私通問題の解決の道を他に求めないで、舉兵に求めたということ自体、彼に動亂に乗ずる「野心」のあつたことを示すものであるが、同時に在地の切迫した情勢を基盤にしてこそかかる道を選び得たのである。かくて彼は周邊の豪族と連合し太守王仁恭を殺し、開倉賑施、檄をとばして兵萬餘人を結集した。⁴⁰⁾ 劉武周の場合のみならず一般に官僚・豪族の舉兵に際し郡縣長官の行政を攻撃、これを殺しているのは共通點であり、飢餓線にある農民を煽動飛檄してその力をかりなければならなかつたというのは、軍事的力の弱さを物語るもので多くみられるところである。

もちろん、「郡の豪帥の多くは南海太守の劉權を推戴して首領となし」⁴¹⁾ また始安郡の豪族が「公、累葉の冠族、久しく鄙郡に臨む。蠻夷威を畏れ士女悦服す。隋臣というと

雖も實は我の君長なり。今江都篡逆四海鼎沸す。王號は止だに一人のものに非ず……また千載の一遇なり」と、郡丞李襲志に舉兵をすすめているように、地方及び在地の特殊條件によつて權力と結んで豪族層が連合して舉兵もしている。以上の二例は隋初から抵抗のはげしい江南の場合であるが、舊北齊(河北山東)の所謂山東豪族層がこの内亂期にどのような動向を示したか残念ながらわからない。それにしてもこれら豪族層の舉兵の本意がどこにあつたかは、李襲志を説得する豪族の言葉でも明らかであろう。

更に社會動亂に乗じて「威福を専らにし生殺情に任した」横暴な地方官僚が、次々と血祭にあげられる現實は彼等に大きな打撃と動搖を與えたにちがいない。その中には農民軍に降伏したのも多數あるが、高涼通守洗瑋徹、楊義臣に代つて農民鎮壓に向つた光祿大夫裴仁基、武陽郡丞元寶藏等の官僚もまた遂に舉兵するに至つてゐる。

このようにしておこされた豪族・官僚等の叛亂は官僚的榮進乃至その機構へのくいこみを志向しつつ、豪族支配維持||自衛の積極的行爲に轉化したものであり、それ故に農民の彈壓に向うであろうこと、したがつてそこに前進的革

命的なもののみられないことは明らかである。

これに關連するが、彼等も農民集團の場合と同じく建國稱號し、天子を頂點とする王朝支配の形式をとつた。その支配体制||秩序は「頗る陳氏の故事に依り」(江南)「一に梁の故事に準じ」(蕭銑)また李淵や李軌のように(太原)「開皇の故事」にならつてゐることからもわかるように、

豪族の支配秩序であつた。まさに彼等の實現しようとしたものは、隋的支配を排除した獨立の地方政權||國家、しかもかつての專制王朝の再現であつた。それはその政權を構成する豪族・官僚の舉兵動機、またその階級的性格からしても當然の歸結であろう。といつて、彼等は決して隋朝政權を維持存續せしめようと考えたのではない。たとえ「開皇の故事」にならつたにしても、それはあくまで制度上の模倣にすぎず、李淵が尊隋の意を表して代王侑を、王世充等が皇子を推戴したのも所詮擬裝にすぎない。こう考えると彼等の叛亂は本質的には隋朝の支配構造を否定するものでなかつた。そして彼等が農民叛亂軍の明らかな敵對的存在としてたちまわつたのも當然であるが、しかし隋的支配の矛盾の中から生れるこの叛亂の反隋朝の傾向と行動は權

力の内部的分裂をよりするべく導きだす役割をになつていたのである。

要するに隋末の諸叛亂が内亂に發展し、所謂群雄割據の形勢をみるに至るのは、そこに反隋的でありながら基本的には農民叛亂彈壓勢力として豪族官僚の叛亂が加わつてきたことによると思う。この過程において、江都では以前から逃亡のきざしのあつた驍果（強制的）傭兵が、故郷はなれての久しき滞在と食糧の欠乏、加うるに帝に北歸の心なきをみて大舉逃亡をはじめていた。この抵抗におしあげられて江都の軍人・官僚等も公然と叛亂計畫を推進するに至つた。⁴⁹⁾かくて右屯衛將軍宇文文化及を首領とする禁軍の叛亂がおこつたのは義寧二年（六一八）三月のこと、隋朝政權はここに崩壊したのである。

以上のようにみてくるならば、たくましい農民の革命的闘争が隋朝政府を打倒し、貴族支配の体制に大きな動搖をあたえたことは高く評價しなければならぬ。しかしこれは第一段階の勝利をみたにすぎぬ。何故なら既に農民のエネルギーを利用しつつ舉兵した新たな勢力こそ、農民にとつての當面の敵であり闘争對象であつたからである。先に

も少しくふれておいたように、その勝利の影には崩壊への因子が成長しつつあつた。

(4) 李淵集團の構造的分析をされた小笠原氏は「豪族集團における官僚は初めはその集團の發展につとめるが、次に官僚の勢力と豪族の勢力が内部で對立し、遂に集團の解体を招く傾向」があつたといわれている。⁵⁰⁾この指摘を氏は主として豪族集團の場合にされるが、官僚の果すかかる發展と解体の作用こそ、勝利に向つて進む農民集團庶民集團といわれる。を解体させる大きな要素であつた。このような内部的矛盾を、かの張須陁のひきいる最精銳の隋軍を河南の滎陽に潰滅させた翟讓の集團のなかに見出すであらう。

翟讓は土豪、農民漁民等からなる河南山東にかけての大農民集團の首領であつた。既に述べたように集團勢力の擴大につれて他の集團を併せ、地方官僚・亡命官僚等がその中に含まれていつた。なかでも楊玄感の餘黨追求をのがれて亡命していた隋の官僚李密は、集團の中で重要な地位を占めつつあつた。彼は部下を率いて翟讓集團に合流したが、例えば「劉項皆布衣より起ちて帝王となる。今、主上に昏く民下に怨む。銳兵は遼東に盡き和親は突厥に絶ゆ。

まさに楊越に巡遊し委ねて東都を棄つ。これ亦劉項奮起の會なり。足下の雄才大略と士馬の精銳を以てせば、二京を席卷し暴虐を誅滅し隋氏亡ぼすに足らざるなり」という如き言葉で翟讓をおだて説得し、また讓の信用してやまなかつた軍師賈雄と結託し彼をして、「公自立するも恐らく未だ必ずしも成らず。若しこの人を立てば事濟らざるなし」と言わしめ、あるいは舊交ありし反煬帝の亡命官僚房玄藻に從者數百人を率いてこさせることによつて、讓をして「密に豪傑の歸するを見て其計に從おうか」と思わせる等の工作によつて、心理的に彼を屈伏せしめた。「吾儕群盜にして旦夕生を草間に偷む。君の言たる吾の及ぶ所にあらず」「君の命ならば力を盡して事に従わん」という讓は、李密の政治的手腕の前に屈伏していることをうかがわしめる。また李密は軍事的作戰指導の面においてもインシアテューヴを奪つていつた。その間にあつて自分の周邊に官僚グループを結集していつたであらうことはいふまでもない。かかる集團指導權の移動は、義寧元年二月、翟讓が李密を推して主上となし政權を樹立することによつて決定的となつた。それまでの農民領導者翟讓は上柱國司徒東郡公となつ

て魏公李密の下に従屬するに至つた。かくて獨立の政府が出来るや「趙魏以南江淮以北の群盜響應せざるなく」「道路には降者絶えず流るる如く」孟讓、郝孝德、王德仁をはじめとする農民集團がこれに歸投し「衆數十萬に至つた」。その中に鞏縣々長柴孝和をはじめとする官僚層の投降がいよいよ増したことは見逃せない。かかる投降の首領や官僚にはすべて官爵を與えて支配機構の中にくみ入れたが、そこに問題がある。即ち斷片的な通鑑などの記事をつないでみても、機構の中樞部たる元帥府と軍事指導面には、隋朝の行政・武人官僚出身の者を多數くみいれ、農民出身の首領等は少ししか入つていない。これは李密が自己の周邊を私的關係を中心とする投降官僚グループで堅めることによつて、翟讓とその指導者層に對抗乃至彼等をボイコットし、自己勢力の擴大をはかつたことの單的な現われである。こうした指導層内部の對立はやがて農民派が官僚派に抑えられ、農民の革命的エネルギーが官僚派に上からつかまれることによつて、反農民的な歪められた方向に轉化利用されざるを得なくなる。しかし農民の中に根をおろし農民的紐帶で結合され支えられた翟讓等の存在は、李密等が農民軍

を自由にする上になお大きな障害になつた。そこに翟讓殺害の陰謀がしくまれる。かくて農民集團はその指導者を失うことによつて、官僚層の野心達成の武力に轉じていつた。翟讓を殺して後の李密は「頗る驕矜士衆を恤まず……戰士功あるも賞することなく初附の人を厚撫す、衆心頗る怨む」⁵⁴⁾有様で、これを指摘した徐世勣はかえつて黎陽出陣を命ぜられた。「名は委任すと雖も實は之を疎んずる」のが本意であつた。⁵⁵⁾また單雄信「土豪も房玄藻の勸告で除かれようとした」⁵⁶⁾。官僚層による實權獨占の意圖は明らかである。李密の參軍賈潤甫が「翟讓殺されて後、人皆公を、恩をすて本を忘れしものという。今日誰か所有の兵を以て手を束ねて公に委するを肯ぜんや。彼等必ず公に奪わるるを慮り命に逆いて相抗せん」と李密にいつていること⁵⁷⁾からしても、官僚層内部に批判「對立反目が深まり、農民離反の傾向の強まつたことがわかる。やがて彼は洛陽政府」(王世充、楊尙⁵⁸⁾に投降して太尉尙書令、東南道大行軍元帥魏國公となり、後更に李淵に降つた。そのひきいる農民集團は唐朝權力下に入り解体された。思うに李密とその官僚層は官倉を攻陥、開倉賑施して集團發展に盡したが、所詮それは

「布衣より起ちて帝王となつた」劉項に自らならんが爲の貢獻であり、必要な手段にすぎなかつた。「王號はただに一人のものに非ず、……千載の一遇なり」といつて舉兵した中小豪族とその意識は決して別々のものではない。農民の鬭争エネルギーと犠牲は、李密がこの隋朝の官職、地位を得るために最大限に利用されたものといえよう。

次に竇建德集團をみると、彼は義寧元年正月に夏國政府をたて百官を署置、長樂王となるが、その中には河間郡丞王綜、景城戸曹張玄素、縣丞孔德紹等の投降官僚が、夏國政府の官僚として入つていた。武德二年(六一九)宇文化及が魏縣に僭號するや、建德は納言宋正本、内史侍郎孔德紹「何れも舊隋官僚」に、「吾隋の百姓となること數十年なり。隋吾君たること二代なり。今化及これを殺す、大逆無道、これ吾讎なり」と、これを討つべくはかつている。德紹等はこれに賛成しているのであるが、この建德の言葉は隋朝の苛政に抗して起つた農民のそれではないであらう。このことは、彼が化及を討つて聊城に入城するや「先づ隋の蕭皇后に謁し自ら臣を稱し、素服煬帝を哭して哀をつく」⁵⁹⁾したることによつてより明瞭である。少くとも建德は農

民集團の指導者として起ち上り、隋軍事力に苦しめられたはずである。その彼が苛政の張本人煬帝の復讐戦をやり、かつ皇后に臣と稱し煬帝の爲に哭するという行動に出るのは明らかに矛盾といわねばならぬ。

前述のように彼の集團中には隋の投降官僚が多數居り、「建德群盜より起り建國すと雖も未だ文物法度あらず。

〔裴〕矩これがために朝儀を定め、律令を制す。旬月の間憲章頗る備りて王者に擬す。建德大いに悦びて毎に諮訪す」といわれるように、その國家体制を整備してゆく上に彼等の

役割は大きなものがあつた。従つて彼は一應長樂王の地位にあつたとはいへ、實質的には投降官僚層が隋的機構と統治を再編掌握していたのであつて、それが必然的に建德の官僚層への依存度を強める結果になり、多かれ少なかれその影響をうけて、集團の性格を變質してゆかざるを得なかつたのではないかと思う（私がさきに夏國政權の官僚的色彩の濃厚さを指摘したのはこの點からである）。「大逆無道これ吾讐なり」と考える意識は、究極的には「臣と稱する」傳統的な君臣意識につながるもので、かかる意識に媒介されて官僚層の影響をうけた結果、このような言動となつて

あらわれたのではなからうか。また彼は農民指導者として最も建德を助けた王伏寶を官僚の讒言を信じて殺している。伏寶は「我罪なし、王何ぞ讒を信じ自ら左右の手を殺す乎」といつて死んだ。⁶⁰⁾こう考えてくると、建德は夏國政權の樹立を機として農民的立場から官僚的立場に轉じ、官僚層への依存を強めたことがわかる（政權樹立以前からかゝる傾向のあつたのはいうまでもない）と共に、官僚層は農民的立場に立つ有力指導者を排除することによつて、建德をその基盤からきりはなし集團を分裂せしめようとしたように思われる。

更に建德は隋朝官僚李淵の集團と軍事的に提携し孟海公のひきいる農民集團をうつて李淵のために働き、轉じて王世充と結んで李淵と戦ひ遂に捕えられという結果になつた。かかる偏向も官僚層の作用によつて生れたものと思われる。しかし農民達は建德の養子をたてて主となし鬭争を遂行しようとしたが、この再結集に對して夏國左僕射齊善行は「夏王河朔を平定し士馬精強なるも一朝にして擒せらる。此の如きは豈天命の歸する所あるに非ざればなり。心を委して命を請うに如かず、民生を塗炭となすなかれ」と分裂させ、⁶¹⁾官屬及び山東の地をあげて唐軍に降伏した。

その後農民達は「吾屬十年來、身は百戰を經、死に當ること久し。今何ぞ餘生を惜みて以て事を立てざらん。吾屬皆夏王の厚する所となる。今仇に報いずしてまさに以て天下の士にまみゆることなからん」と、李淵の懷柔策を拒否した農民指導者の下に結集し、劉黑闥を首領に推して抵抗をつづけた。江南の徐圓朗、北方の高開道との間に農民連合も作られた。かくて唐軍の主力に決定的打撃を與えて、一旦失われた河北の地を奪回し、武德五年（六二二）正月、黑闥を漢東王とする政權を洛州に樹立、建德時代の舊制を復活再編し、河北に抵抗據點を作つたのである。しかし、官僚と地主勢力を結集していつた唐朝權力の政治的軍事的擴大に對して、農民の叛亂集團は逐次鎮壓され、武德六年（六二三）黑闥殺され、貞觀二年（六二八）の梁師都滅亡を最後に隋末の内亂は終焉したのである。

以上のように見てくると、集團内の官僚の言動は、集團の發展と解体を通じて一貫して階級的利益に奉仕するものであつたといえよう。というのは、たとえ個々的には個人的利益を意圖し追求したものであつたにしても、その實現は客觀的には農民階級を分裂させ、成長を抑壓することに

よつて可能だつたからである。しかもこのことは上記の二例においてのみならず、官僚層を含んだ他の農民集團においてもいい得ると思う。集團の中で官僚がかかる行動をとり、集團指導權を徐々に掌中におさめていくのは、前記の年次からも明らかなように、隋朝政權崩壞以前からのことである。農民的利益を擁護し、その觀點から鬭争を推進しようとする農民領導者と、あくまでも彼等を利用して反革命的に活動する官僚層の對立と矛盾こそ、農民集團を分裂解体に導く因子であり、四圍の情勢ともからみつつ後者が指導權を握つてゆく結果、歴史の齒車はその廻轉方向をかえたのであると思う。

しかし同時に農民自体のもつ限界性をも考えなくてはならぬ。前に述べた「君の言たる吾の及ぶ所にあらず」、「此れ英雄の略なり、僕の堪うる所に非ず、ただ君の命ならば力を盡して事に従わん」という翟讓の言葉には、李密の階級の本質を無視し、ただその言辭と博識の前に無條件的に屈する、當時の農民にまつわりついた奴隸的卑屈さが看取される。また竇建德の官僚層への依存化も、隋的官僚機構の整備や律令その他の制度——それはあげて農民階級を律

令的支配下に抑壓するためのものであつた——を甚だ悦ぶのも、要するに長い家父長的支配を基底にした権力体制の中で成長した農民の、前記卑屈さにもとづくものではなからうか。この農民意識が官僚層の反農民的言動を十分に制御できず、解体への役割を果させたのであらう。しかもかかる意識の制約を現實にもつ農民が、果敢な抵抗を展開せざるを得なかつたところに當時の歴史的現實のきびしさを知るべきであらう。

六 結 語

七世紀初頭、高句麗遠征を契機として反外征鬭争に結集した農民の抵抗は、隋朝政權に大きな動搖を與えた。加うるに権力内部における官僚の對立を背景に、疎外されつつあつた楊玄感がこの農民のエネルギーを利用して反煬帝の叛亂をおこしたことによつて、動搖と分裂は益々深まり、叛亂は全國的に擴大した。土豪をはじめとする農民の叛亂は、豪族の支配に脅威を與えたが、そうした中で武人官僚を中心とする豪族地主層が叛亂をおこした。これは基本的には自己の支配の維持と、野心達成のための農民叛亂彈壓

勢力であるが、同時に隋朝支配の大きな分裂を物語るものであつた。この勢力こそ隋朝政權崩壊後の農民軍の新しい敵であつた。しかし農民集團の發展過程で投降官僚層は集團解体の役割を果し、それは農民の階級的意識の低さ・奴隸的卑屈さと相俟つて、李淵集團に代表される反動勢力に農民鬭争の成果をさらいとらせる結果になつた。ここに唐朝政權の成立をみるのであるが、ではこの内亂はどのような歴史的意義をもっているのであらうか。

均田制的支配の排除を志向してこの内亂をたたかつた均田農民はこれを排除し得ず、再び同じような体制の中にしばられることになつた。その結果早くも貞觀十一年には侍御史馬周の「供官の徭役道路相繼ぐ。兄去り弟還る、首尾絶えず、春秋冬夏略々休む時なし……四五年來百姓頗る嗟怨の言あり」との上奏をみた。⁸³⁾均田農民の抵抗はかくして唐朝治下においても絶ゆることなくつづけられた。唐初における抵抗の具体的内容については後日の研究に俟たねばならぬが、貞觀元年當時、太宗が山東人と關東人を對立的に考え、山東人を特別視せざるを得なかつた背後には、山東農民軍が唐朝軍事力に最後まで抵抗し、なお屈しない現

實があつたものと思う。山東を中心とする抵抗の歴史は唐末までつづくのであるが、こうした均田制支配に對する抵抗こそ唐朝政權をして老大な官僚機構を整備擴充させ、法律制度を強化させざるを得なかつたのである。それはそれだけに均田農民の獨立性が高まりつつあつたことを物語るものであらう。

ところでかかる抵抗を抑壓する支配權力はどのようにかわつて來たか。

李大亮が功により高祖から奴婢百人を賜つたところ、その多くが没落した衣冠の子女のなれの果てであつたので皆放還したといふ話⁶⁵⁾が語つてゐるように、隋末の内亂によつて門閥貴族・大豪族はその經濟的基礎を喪失し没落してゐたのではないかと思われる。そのことは唐朝政府の構成要素が、南北朝以來政治權力を掌握してきた貴族官僚ではなく北朝の武人的官僚階層であつたといわれることからも考えられるのであつて、貴族階級は隋唐變革期を機として權力機構から後退せざるをえなかつたのではなからうか。逆にいえば非門閥貴族階層の政界への進出が目ざましくなつたことを意味するのであつて、則天武后の時代になると

全く家柄によらないものが宰相にすらなり、玄宗朝にかけて支配的官僚層が明らかに交代していつた。しかし内亂を経過して成立した唐朝政權の階級性は本質的に從來と何等ことなつたものではなかつた。李淵が太原に舉兵した當時、彼は突厥の防衛及び叛亂鎮壓の任務をもつた軍司令官として山西を中心に大きな軍事力を有していたため、豪族地主出身の亡命官僚が彼の下に集り、李淵との私的恩顧關係を通じた地方官僚が協力態勢にあつた。こうした豪族地主的官僚層を組織する場合、李淵は彼等の豪族性は背後におしやり、李淵を頂點とする官僚的統屬關係において組織した。「衆を收むるに官を以てする」は兵を用いるより勝ると考へる李淵は、投降してくる豪族等も官僚的身分においてその機構の中にくみ入れた。これを基礎に唐朝政權が成立したのであるが、豪族性を背後におしやるその政權は南北朝以來の門閥尊重的社會に生きつづけて來た貴族、豪族達には満足出來ないものであつたらう。しかし現實には内亂によつてたかまつた隸屬農民の抵抗が、自己の大土地所有と私的人民支配を益々困難にした。この抵抗と農民の叛亂を抑えて支配を維持するためには、どうしても強大な專制權

力によらざるを得ない。そこに唐朝權力をうみだすのである。従つて自己の傳統的政治的地位を守つていくためにはたとえ唐朝政權のあり方に不満があつても、その官僚の一構成要素としてつながつていかざるを得なかつたのではなからうか。しかしそうした官僚機構に晋陽の郷長劉世節に代表されるような所謂土豪層がはいつていたことを忘れてはならぬ。彼等こそ總じて均田制支配下の階級分化の中から成長してきた地主的農民であり、農民叛亂の指導者であつた。従つて非門閥的諸階層によつて構成された唐朝政權は豪族地主階級の利益を保證する權力でありながら、その内部には必ずしも利害を一にしない對立矛盾の芽を溫存させていたと考えられる。この點なお今後の實證に俟たねばならないが、ともかくかかる變革を推進し、貴族支配体制に大きな打撃を與えたものこそ、七世紀初頭の中國における内亂であつたと思う。史料制約もさることながら、實證の弱さと歴史的感覚の鈍さをいたく感ずる私は、諸賢のきびしい御批判を期待する。

- ① 隋書卷二三五行志、通鑑一八二大業九年十二月
② 通鑑一八二、大業九年八月 ③ 舊唐書五六 梁師都傳

- ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺